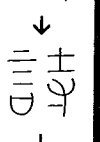
詩

三年　画数 13　筆順　オン シ　クン

成り立ち



詩

〝言葉〟のいみの〝言〟と、〝やくしょ〟をあらわし〝きまり〟のいみをあらわした〝寺（2年152）〟とを組み合わせた字で、「〝きまり〟のある〝言葉〟」といういみをあらわした字です。

「言葉のつかい方にきまりのある文」のことで、読んでこころよいちょうしのあるものです。〝韻文〟とも言います。

五七五の俳句や、五七五七七の和歌も、詩のなかまです。中国の一番みじかい詩は、五五五五の二十字で作られた五言絶句の詩です。

使い方

▽むかしは、「和歌、漢詩」といって、日本のものが歌で、中国のものが詩であるとされたこともありましたが、明治いご、新体詩があらわれ、自由詩というものもあらわれ、詩人も多くあらわれました。

熟語例

▽漢詩（漢字ばかりで書かれた中国の詩のこと。一番みじかいのは五言絶句ですが、つぎは七言絶句の二十八字です。唐じだいの詩〔唐詩〕がゆうめいです。）

▽詩人（詩を作る人のこと。唐の杜甫は詩聖、李白は詩仙といわれて、もっともゆうめいな詩人です。）

▽新体詩（明治に生まれた新しい形体の詩。荒城の月の七五調、椰子の実の五七調とあります。文語体で書かれました。）

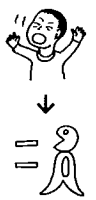
▽自由詩（なんのきまりもない、自由な詩。詩のふんい気をたいせつにするだけで、まったく形式にとらわれない詩。詩という字からいえば「詩ではない詩」ということになります。）

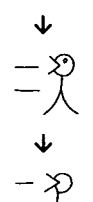
▽律詩（漢詩の形式の一つで、八句からなるもの。五言律詩は四十字、七言律詩は五十六字です。）

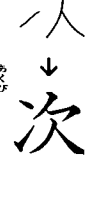
次

三年　画数 6　筆順　オン ジ・シ　クン つぎ・つ＝ぐ

成り立ち







次

人が大きく口をあけた形をあらわした〝欠（4年503）〟と、〝二〟とを組み合わせて作った字です。

ふつうは二番になりますと、一番になりたいと思ってがんばるものです。ところが、「一番の〝つぎ〟なのだからりっぱなものです。自分は二番でまんぞくします」とかんがえて、のんきに〝あくび〟をしていることをあらわした字です。

〝つぎ〟〝二番め〟といういみの字です。

また、「一番め、二番め……」という〝じゅんじょ〟をあらわすことばとしてつかわれることもあります。

使い方

▽みんなで野球をしました。さいしょに中山くんがうちました。次はぼくの番でした。ぼくは、うまくうって、二るいまですすみました。

▽三年生になると、しゅくだいが多くなりましたし、家でやらなければならないことも多くなりました。次から次へと、やらなければならないことがあるので、大へんです。

熟語例

▽次席（二番目の席。二番目の地位）

▽次男（二番目の男の子。「ぼくは次男です。上に、おにいさんが一人います。いもうとも一人います。いもうとは、ぼくより年下だけれど、長女というのだそうです」などというふうに、つかいます。）

▽次女（二番目の女の子）

▽席次（席の順序。また、せいせきなどの順番をいうこともあります。）

▽目次（本のないようの題目を、順番に書いたもの。「わたしは本を読む時は、まず、ざっと目次に目を通します」などというふうに、つかいます。）